萩原先輩の想い出

阿部　敏雄（昭和24年電化卒）

昭和8年に横浜高等工業学校電気化学科を卒業された大先輩萩原忠臣氏は平成23年2月25日にご逝去なされました．満百歳の大往生でした．

小生，平成9年に横浜電化材化会の会長就任以来，同会やその後小生が関わったNPO法人YUVECや地域同窓会である六郷会も含めて萩原先輩には幾度と無く身に余るご厚情を賜りました．ここに深く御礼申しあげると共に謹んで哀悼の意を表する次第です．

先輩のご略歴・ご業績などについてはここでは触れません．ここでは先輩とのお付き合いの一端を手元にある写真を主体にご紹介し在りし日の先輩を偲ぶ事としたいと思います．

1. 平成11年以来毎年横浜電化材化会としてゴルフ大会を開催してきましたが，先輩には殆ど毎年参加して頂き会を盛り上げて頂きました．その前夜は有志でロッジに泊まるのを通例としていましたがこれにも毎回参加して頂きました．

写真1は，平成17年4月25日の鶴舞CCにおけるゴルフ大会の前夜のロッジ，写真2はその昼に車で大多喜のレンゲ畑にお連れした時のもので最も想い出に残る一枚となりました．

先輩最後のゴルフ大会参加は平成20年（六郷会

写真1

写真2

写真3

写真4

と合同大会）で，この時は２次会のカラオケ会にまでお付き合い願いました.

先輩はこのような場にも気さくに参加されましたが，歌う事は全く無かったのですが，この夜だけは軍歌を一つだけ（たしか「兵隊さんよ　有難う」）歌われたのも今となっては懐かしく思い出されます（写真３:平成20年５月14日,スナック「蛍」にて）.

2. 萩原先輩は，ホームカミングデイ，YUVECの総会，六郷会の総会などにも熱心に参加されました．先輩の母校に対する想いの篤さは並外れていたように思います.

写真４は，平成21年のホームカミングデイ（11月５日）の２次会を横浜・馬車道十番館で開いた時のものです.

萩原大先輩のご冥福を心からお祈りいたします.

畏友梅津敏裕さんを偲んで

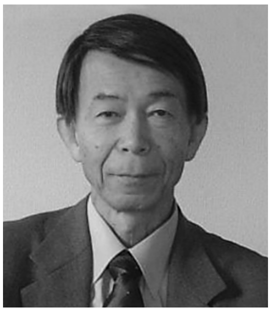
堀　雅宏（昭和43年電化卒）

国大工学部電気化学科での４年間を共にさせていただいた梅津敏裕さんが昨年10月に逝去された．いつも几帳面であられた梅津さんから急に連絡が途絶えて会の事務局の方ともどもどうされたのだろうとお話していたときに入った突然の報であった．後日，すばらしい毛筆の心のこもったお便りを下さった奥様のお話では，大病を克服されてから23年目の発病であられたそうである．国大化学会で梅津さんは長く会計監事を勤めて下さって，役員会ではいつも大所高所からご意見を述べてこられた.

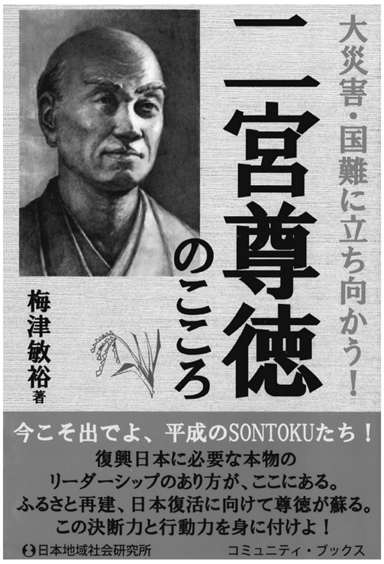
梅津さんは社会人となられてから中小企業診断士の資格をとられ，長らく経営コンサルタントを業とされ，晩年は独立されて人事工学研究所を経営されていた．また，茨城県龍ヶ崎市で古民家のいろりのレストランをご家族で経営されていた．私は生前梅津さんに「経営コンサルタントがついていてレストランがもし潰れるようなことがあれば，経営コンサルタントの実力が分かってしまうね」などと軽口をたたいたことがあったが，この３月に奥様とお目にかかって，レストランは予約でほとんど埋まっているということをお聞きした時にはほっとするとともに敬服したものであった.

梅津さんは哲学と山を愛し，まじめに人生に向き合ってこられた方であった．私は結婚披露宴によんでいただいたくらいだからクラスメートの中では親しい方だったと思うが，梅津さんが他界されてからお聞きした奥様のお話から私は梅津さんの一面しか知っていなかったことが分かった．お互いに若かった頃に梅津さんからある宗教団体に入っている話は聞いたことがあったが，奥様から結婚されるためにその会を辞められた話をお聞きしたときには，驚きというより感激した.

梅津さんは以前「なぜ目標管理は成功できないのか」（経営書院）を著されたがことがあったが，亡くなられる直前に上梓された「二宮尊徳のこころ」（日本地域社会研究所）の本こそ無類の読書家で経営コンサルタントであられた梅津さんの人生の集大成でないかと思われてならない．私自身も以前から二宮尊徳を二つの点ですごい人だと思っていた．農



平成21年頃の梅津敏裕さん



著書「二宮尊徳のこころ」の表紙

業実践の中で「自然は循環して成り立っている」と認識していた点（環境という言葉は使っていないが先駆的）と経済では貧しいバングラデッシュで小口の融資で農民の自立を助けたグラミー銀行（後にノーベル賞受賞）とほとんど同じことを尊徳は江戸時代の小田原で「分度」とともに実践していたことである．そのような尊徳に梅津さんは心酔されていたのだが，実は私は，多くの尊徳の類書があるのにどういう本を書かれるのかなと思っていた. しかし，梅津さんの本は単なる伝記でなく，尊徳の心を自分の心とされ（私のは頭の中だけであるのに対して），そこからご本人の思いを込めて絞り出された内容であること，それはご著書の章立てとそのタイトル，章ごとに挿入されたご自身の短歌からも伺い知れた．直接震災復興に当たっておられる何人もの読者から「この本のおかげで復興に向かう心構えができたのは紛れもない事実です．ご主人の意思は間違いなく気仙沼の地で息づいています.」「梅津さんを囲んで色々なことを語り合いたかった！」などのメールが亡くなられた後にも奥様のもとに届いているそうである．すばらしい本で著者冥利に尽きる．梅津さんは生前にその反響の一部のメールは読まれていたのは本当によかったと思うが，男子の平均寿命79歳の日本で67歳という享年はいかにも早すぎて惜しまれてならない．ご本人が一番残念に思っておられたにちがいない．ありし日の梅津さんを偲びつつ, ご冥福をお祈り申し上げます．（平成24年3月）

長寿の亀

池田　錦七（昭和9年応化卒）

平成24年の初春が静かに明けた．干支では壬辰歳になる．辰は龍に通じ，四神獣即ち鳳凰・麒麟・亀と龍．縁起の仲間を持つ．仏法では水を司る神・龍神となり，童話にある龍宮は誰方も耳にする昔語りである．その案内役の亀が鶴と組み「長寿」の祝いに添えられて「鶴は千年・亀は万年」と諸事万事受け継がれてきた.

その生体の鶴は北海道, 釧路湿原の丹頂鶴を知り，造作の鶴頭の根付けを持っている．長寿の亀との出会いは多く，亀に曳かれ競い歩いて一世紀「白寿」の加齢を持つ私だ.

〈泥亀〉

東京の山手・和田村に育つ幼童期，楽しみに新井薬師の縁日が. 見せ物小屋に混じって泥亀が売られ，紐に吊られ四肢のバタつきが面白く，我が家の一員に加えたが，何時の間にか消え失せた．それが亀との出会いであった．後年，私は北陸の関門・敦賀に日仏合弁日本ニッケル K.K. 創立，工場を任された時，この地は伊吹山系と野坂山地を源流とする伏流水に恵まれ各地に湧き出し沼沢を造っている．雨後の一時，親亀・子亀の甲羅干し．捕る者はなく，私は工場に移し飼育，はじめの給餌に困った．安易に工場給食の残物，花鰹・人工魚餌から刺身まで，一週間, 亀は餌付かなく途方に暮れた．工場途上に「木の芽」川が流下している．偶然の出来事，出勤時その川岸に錦鯉の死骸が, そこに亀が食い付いていた.「水」だと早速，工場雨水の側溝に水流し魚の臓物を投入しておくと亀は食い付き，泥亀の飼育が成功した．私は亀の餌付けから「初心」を変えぬ「忍耐」の心を汲み取り,「兎と亀」の物語を思い起こした.

〈亀の国へ〉

私の好きなインドネシアの旅は十余回，ジャバ島からヒンヅー教徒のバリ島へ．或る時はセレベス島からウォーレス線を越えロンボック島へ．お目当はテンガナシ村の「先染絣」と島々の「お歯黒」の研究であった．独立間もない頃のバリ島「神の国」の島民は純朴で盗みを知らない．また，未舗装の道路工事の女達は乳房丸出し，世の汚れもない．国も観光に意を注ぎ, 日本からの直行便は赤道通過の「証」を出したり, 機内にて入国審査を施行するなど, サービスに努めていた.

〈亀の背に〉

この国は「サテイ」(焼き肉) と「ナシゴレン」(焼き御飯) で旅が出来る．そのサテイは数種類．ヒンヅー教徒は「牛肉」，回教徒は「豚肉」は駄目．そこで「鶏」は宗教に無関係な「サテイ」であった．そんな話の或る時，「亀のサテイ」を耳にした．物好きな私は亀のサテイに心惹かれてサスールの宿舎から程遠い「ヌサドア」の海浜へ車を飛ばした．此処彼処尋ねた後，波打ち際に竹囲いの亀小屋を見付けた．番小屋のおばさんに運転手が語っていると，中に入っても良いと門戸を開けて私を招じ入れた．竹間を透かし射し込む日光は薄暗く，そこには数十頭の大亀が白砂に首を着け昼寝でもしているのか，「亀に乗れ」という．怖いが好奇心も手伝ってソロリソロリと亀の背に．六十キロの私を甲羅の上に，亀はどこ吹く風と動かないので私は安堵した．

亀は従順で強い．浦島太郎の昔話も実話のようにも思えた私だ．いくつにも仕切られた亀小屋には，三百頭いただろう．私はヌサドアの海浜で，今様の「浦島太郎」になって嬉しくなった．海亀の捕獲は禁止と聞くが，それがカリマンタンから運ばれると聞き，目的は知らない．囲いの内は汚臭がなく清潔，それは食餌は海草であり排泄物は汐の干満で波が竹間から凌って一石二鳥の管理であった．小屋の片隅に目を移すと「亀甲」が乾してある．やっぱり「殺す」のかと悲しくなる．おばさんに謝辞を述べ，引き返した処に大樹が，そこから良い匂いが流れてきた．炭火を直火に起こし，ぶつ切りにした肉を五個ほど串に刺し，タレをつけジイジイと黒焼きに，おばさんの好意に甘えて口にした．亀肉のサテイ，豚肉のように柔らかで旨いグルメであった．

私は幼童期，泥亀と遊び兎と亀の駆け比べ，浦島太郎の伝説地・丹後の伊根にも出かけている．晩年その大亀の群棲地・南海へ．バリ島にて大亀の背に．今様，浦島太郎になって嬉しかった．或る時はマレー半島．嘗て日鉱が稼業・ヅングン鉄山の海浜へ海亀の産卵見物に夜中出かけたこともある．または世界第一の金持ち国ブルネイにはシンガポールから．そこで海亀の卵を鶏卵代わりに食べている．

亀との出会いは意図もなく多様であった．その亀が「長寿」だと気付いた時，私も亦「白寿」を迎えていた．亀さんとの競り合いかまたは亀の守護かもしれない．亀の辛抱強い「心根」を私の信条にしていたのが通じたのかと追憶している．

横浜国立大学工学部応用化学科・電気化学科昭和 49 年 3 月卒業同期会開催さる

横山　幸男（昭和 49 年電化卒）

平成 23 年 11 月 26 日（土曜日）12:30〜4:00 pm に横浜中華街聘珍樓本店において，横国大応化電化 45 年入学同期会を行いました．ここ数年来続いている会であり，毎年参加者数は増加の方向です．今回も卒業以来初めてという初参加が 2 名おられ，また台湾からわざわざこの会のために帰国された方もおられ（田中氏）ました．今回の参加者は，戸田，松尾，蔵並，田中，名川，後藤，吉富，関，朝田，

稲葉，横山，河村，阿達，安西，伊藤（幸），青木，笹野，下田（世話役）各氏の計18名でした．昔話に花が咲き，時間がたつのも忘れて大いに盛り上がりました．この記事をごご覧になってぜひ参加してみようと思われる方は，遠慮なく下田氏または横山まで連絡してください．

横山へのアクセス
E-mail: yokyuk@ynu.ac.jp
URL: http://www.chem.ynu.ac.jp/lab/y2lab/

Planned Happenstance（プランド ハプンスタンス）随想［第4話］柴田鶯谷先生と書道熱中時代

藤平　正氣（昭和44年応化卒業）

はじめに

“キャリア（Career）”とは，極めて多様な概念を有し，広義で理解されるようになってきた，と前回の［第3話］でも紹介した．狭義の職業としての“キャリア”に始まり，役割期待に対する個人の反応としての“キャリア”，そして，自己実現の手段としての“キャリア”へと拡がる．しかし，普通の人の現役時代，直近の役割や仕事に追われる毎日が通常であろう．現代人に限らず古来人間の苦悩は，物心両面での均衡充実のむずかしさに在った．“人はパンのみにて生くる者にあらず”の含意が源流にある．

今回は，“人が生涯を通じて関わる一連の労働や余暇を含むライフスタイル”や“人が生涯に行なう労働と余暇の全体”という1980年代の“キャリア”の定義を支持し，労働から余暇につながった“趣味”に関するPlanned Happenstanceを紹介する．

人と社会の接点で遭遇した書道の師，柴田鶯谷（しばたおうこく）先生．導かれて熱中した“趣味”書道，1995年からの4年半の体験を辿る．まさに“50の手習い”であったが，懇切丁寧な指導を受けた“至福の時”は，天からの下賜，絶妙なタイミングでの不思議なご縁である．

遠い昔のお習字

寺子屋の時代から“読み・書き・算盤”は学びの基本である．今では，これらに“話し”を追加し，

これが日常の個人を強く表現している．“書き”は手習い，つまり“習字”で，私の小・中学時代には，国語から独立した教科であった．概ね，女生徒が得意とする教科で，教室や廊下の壁に張り出された清書を仰ぎ見た記憶がある．

手首を机上に固定して狭い範囲で“ペン”を走らせる，これは得意である．一方，手首も浮かせて身体全体を動かし比較的広い範囲に“毛筆”を躍らせる，今以って掴めないコツがあるようだ．

しかし，鉛筆やペン習字からは想像できない毛筆の勢い・流れ・まとまり，書く時の姿勢・息遣い，紙との馴染みや墨の香に教科を超える何かを感じていた．これは書道という“道”である，と長ずるに及んで納得できた．“道”を極めて“キャリア”と公言する人は多い．

柴田鶯谷先生との出会いと書道との再会

1993 年 4 月，社命により本社転勤となり，人事・人材開発の職域で，主として採用・教育研修やキャリア開発支援の仕事を担当することになった．今までの“理系キャリア”とは異なり，自他が認める“文系キャリア”への挑戦が始まった．この職域の業務踏襲にやっと慣れ，自分色を出して工夫改良に入る頃の 1994 年 12 月，達筆の K 氏に誘われて書道部に入ることになった．

M 社本社書道部での初練習は，明けて 1995 年 1 月 11 日で，初めて柴田鶯谷先生にお会いした．その時，鶯谷先生は 79 歳とお聞きした．歳相応の風貌ながら，筆を巧みに操り鮮やかな墨痕，見事な筆勢を残す技を目の当たりにし，“すごい先生だ”といきなり感動を覚えた．筆全体に墨を含ませ，筆先を整えることなくごく自然に書き出し，入り・撥ね・のばしでは瞬間的な溜めにより穂先を揃えてしまう，すべての技が新鮮であった．

毎週水曜日が練習日，勤務終了後会議室で，1~2 時間の練習が始まった．

最初の頃の手本として，「平正」，「独清」，「爽神」，「不惑」や「雲心月性」，「寂然不動」，「翛然會心處」をいただいた．当時の私の気持ちを見透かした，あるいは，座右の銘につながるような呻吟を用意してくれた，奇遇という他に言葉が無い．

暫くして，千字文の楷書と草書の練習が始まり，半紙に 6 文字・二書体の手本をいただき臨書することになった．鶯谷先生も東京近郊の同じ M 市在住で，しかも私の自宅から徒歩 5 分の所に住んでおられるという偶然が重なり，休みの日にせっせと練習するようになった．地の利も得て，手本と清書が頻繁に往復した結果，通常より早く 3 年で千字文の臨書を修了できた．その間，軸装や額装物の手本もいただき，社内文化祭への参加の他，1996 年から三菱合同書道展に参加を始め，その後 5 年間出展を続けた．

柴田鶯谷先生と草創期の書道部

この［第 4 話］を書き始めるにあたり，先日，M 社本社書道部を開いた大先輩，生き字引のような Y 氏を訪問し，来し方をお尋ねし下記をまとめた．

・1915 年（大正 4 年）：東京鶯谷に生まれる．父君も書家で書壇の重鎮．

・1965 年（昭和 40 年）：大阪在住．書道研究「臨書会」を主宰．
日経新聞社大阪支局並びに大阪化学繊維会館等で道場を開き書を指導．

・1970 年（昭和 45 年）：〈大阪在勤中の Y 氏，大阪化学繊維会館で鶯谷先生に出会った．独習が長かった Y 氏，鶯谷先生の書に触れ，“これぞ真の書なり”と衝撃を受けた．〉

・1974 年（昭和 49 年）：〈東京在勤となった Y 氏，書道同好会の発起人となった．会員約 20 人.〉
鶯谷先生は月 1 回上京し，講義と実技指導を開始．この他，手本・清書・作品を郵便で往還し，添削・書評する活動も開始．〈やがて，会員は，M 社の文化祭，書初展等で作品を発表するようになった．連絡誌も発行.〉

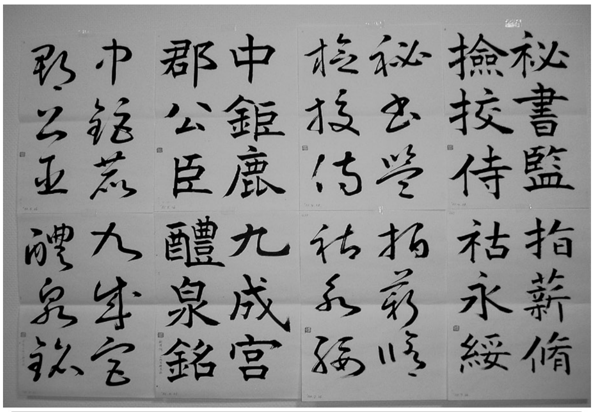
・1975 年（昭和 50 年）：〈書道部として認定され，部支援の予算を獲得. 会員約 30 人. 会誌を発行. 第 1 回の三菱合同書道展が開催された.〉

・1978 年（昭和 53 年）：活動盛況，第 4 回の三菱合同書道展への初参加を指導．会員約 50 人．
鶯谷先生は日経新聞社を退任, 大阪道場を閉じ, 東京近郊の M 市に転居. 鶯谷先生が月 2 回来社, 書道稽古も実技指導へ．この時，鶯谷先生は 63 歳．

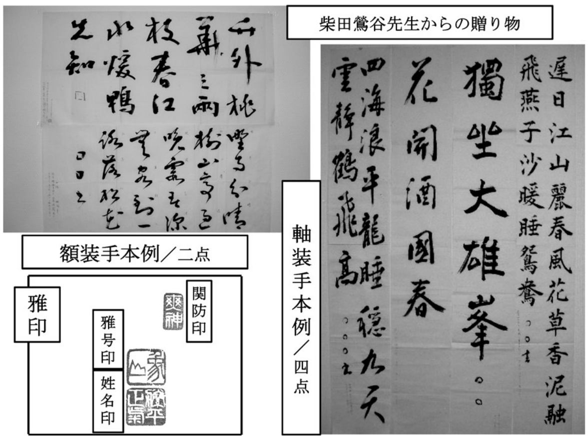
・1995 年（平成 7 年）：〈書道部に入部した私，79 歳の鶯谷先生に巡り合えた.〉

・1997 年（平成 9 年）：鶯谷先生の意欲的な指導により，21 人が作品を仕上げ，第 23 回三菱合同書道展に参加できた．

・1999 年（平成 11 年）:〈私は社命により“理系キャリア”に復帰，研究所在勤へ．実技指導を受ける機会を失った私，4 月から鶯谷先生との郵便往還で書道を継続.〉
鶯谷先生は第 25 回三菱合同書道展への出展を指導されたが，7 月から体調を崩され入院，11



柴田鶯谷先生からの贈り物／千字文手本例／楷書と草書・4組



月 27 日に逝去，享年 84 歳.

柴田鶯谷先生の指導語録

最初の暫くは，“のびのびと，ゆったりと，勢いよく，手本をよく見て，身体全体を使って書く”と言われた．慎重で筆運びが遅い私は，この後，“もっと速く，勢いよく”と言われ続けた．入り・撥ね・のばしでは，溜めに躊躇し，さらには時間が長くなり，墨を出し過ぎたり滲ませたり掠れたり，書体を崩すのが私の常であった.

字の勢いとまとまりの狭間での精進，両立させて書が生きる，理解しても書く字に乗り移らない．さらに，勢いに乗れないと墨継ぎの回数が増え，流れが途切れ,書全体のまとまりや濃淡の妙も望めない．そんな時，鶯谷先生は，“まあ気楽に書きなさい”という激励を忘れない．まとまりの基本は勢い，と奥義でのつながりを感じた.

柴田鶯谷先生からの贈り物

・いただいた手本は 421 点
・清書した作品から，4 点を軸装に，2 点を額装に仕上げることができた.
・“藤平氏清鑑”としていただき額装した「満目青山」
・指導を受けて作った雅印．関防印の“爽神”は爽やかな心，雅号印の“象山”は故郷讃岐の象頭山と佐久間象山の氣概，姓名印の“滕平正氣”は一字を篆書体で.
“藤”の字は，篆書体では“滕”の字を使うのが正しく,姓名印ではさらに変じて味を出している，と教えられた.
・書への姿勢，禅宗呻吟語，座右の銘
氣概を持って正義を為すは雲心月性寂然不動の境地から也
・三つの悟り，熟年での言動の拠り所
「後生畏怖」は“後生に礼を尽くす”,「還恩連鎖」は“ご恩還しの連鎖を起す”,「小喜大感」は“小さな喜びを大きく感じる”，と達観できた.
・追加，Y 氏から譲り受けた鶯谷先生の手本が 10 点

おわりに

年賀状を毛筆で書きたい，という思いは未だ実現しない．相変わらず筆ペンをなだめて毎年が過ぎていく．ささやかだが課題を抱えているとまだ生きる意味がある.

年末になると，鶯谷先生の書と往時を思い出す．しかし，鶯谷先生とのなんと際どい遭遇，最晩年の 4 年半の指導で去って行かれた鶯谷先生，仕事と趣味を中心とした人生の軌道での接点，ご縁のお蔭様はやはり天であろう.

さらに，“文系キャリア”の体験に導いた S 氏，入部を誘ってくれた K 氏，書道部を開き活動を軌道に乗せた Y 氏，Planned Happenstance のつながりに感謝している.

参照図書等

① 田邊萬平著『随想・書について』(株)日本習字普及協会（第 4 版／ 1970 年）
② 伏見冲敬著・筒井茂徳補『(新訂）書の歴史―中國篇―』(株)二玄社（初版／ 2012 年）
③ 伏見冲敬著『(増訂）千字文詳解』(株)角川書店（初版／ 1983 年）
④ 落款字典編集委員会編『(必携）落款字典』柏書房(株)(初版／ 1982 年）
⑤ 石川九楊著『書に通ず』(株)新潮社（初版／ 1999 年）
⑥ 石川九楊著『「書」で解く日本文化』毎日新聞社（初版／ 2004 年）

日韓協業とサムスンの企業文化

佐藤　登（昭和51年電化卒・昭和53年修士修了）

1.　エネルギー事業における日韓協業

競合から協業へ

日本と韓国のビジネスでは競合する分野が多々あり，特に最近では日本の製造業に対する韓国の優位性が浸透しつつある．エレクトロニクス，半導体，リチウムイオン電池などがその典型であるが，この流れは当面続きそうである．

一方，競合ではなく協業する場面も多く生じてきている．私が関係している二次電池分野，とりわけリチウムイオン電池においてである．

遡ること2006年から07年にかけて，リチウムイオン電池にまつわるリコールや生産工場の火災などが日韓の多くの企業で噴出した頃，サムスンでの事故やリコールは起きなかったが，この問題を契機に日本の経済産業省と電池工業会が安全性試験方法の全面的見直しを図った．

そこで採用された試験法は，08年11月に日本の電気安全法に組み込まれたが，さらにこの試験方法を国際標準にしたいという電池工業会の意向を受け，日韓の橋渡し役として行動した．

電池工業会と韓国電池研究組合との最初の協議を08年3月にソウルで執り行ったが，それから4年が経過した．この国際標準への提案は19の関係国の投票により，本年にも正式に批准される見通しとなっている．

この日韓関係は極めて友好的に進展し，現在では頻繁に交流を図っている．そして11年11月には韓国の電池工業会も正式に発足し，その発足会には日本の電池工業会からトップが招待されている．

これまでは小型リチウムイオン電池，すなわち携帯・スマートフォンや，ノートPCなどのいわゆるモバイル用電池を主体とした連携であったが，今後は自動車用，家庭用と産業用の大型蓄電システムでの連携も必要になっている．

11年3月の東日本大震災の後に，家庭用燃料電池や太陽光発電，それに蓄電システムに対する需要と期待が一気に湧き起り，蓄電分野ではリチウムイオン電池に対してのビジネスモデル創りが活発で，世界に先駆けて新たな市場が生まれようとしている．韓国や米国，欧州でもスマートグリッド実証試験は行われているが，日本では既に新たなビジネスが着々と進行している．

サムスンは日本のニチコン社とリチウムイオン蓄電池の独占供給契約を取り交わし，本年から家庭用蓄電池システムの新しいビジネスに参入した．この蓄電池の研究開発は蓄電池用途に特化して開発していたものの，自動車用リチウムイオン電池事業も本格的に進んでいくことを考慮し，自動車用に開発している電池を蓄電用にも供給する方針にビジネスモデルを変更した．

自動車用途は温度環境，振動，耐久性，電池への負荷において蓄電用途やモバイル用途に比較して圧倒的に開発のハードルが高いことから，性能面では自動車用から蓄電用に転用しても全く問題ないためである．

そしてモバイル用と同様に，日本でのビジネスを図ることから安全性試験法の共有なども同時進行で進めていくことが求められている．モバイル用リチウムイオン電池を通じて，既に電池工業会との連携を図ってきたことから，この分野でも日韓の親密な連携と協業に発展させていく必要がある．

また別の分野でも日韓の連携が進んでいる．10年夏に韓国で発足したWPM国家プロジェクトである．これはエネルギー，ディスプレイ，自動車などに適用する先端素材の研究プロジェクトであるが，これは全世界の企業や大学が関わるグローバルプロジェクトである．

日本との連携や日本企業の参加，大学教授の諮問委員の委嘱については，著者自ら働きかけ関わってもらうことにつなげた．昨年の夏から今年の1月にかけて，日本から諮問委員の教授を3名，3回にわたって韓国へお連れし，講演やディスカッションをしていただき，特に将来技術に関する意見交換を有意義に行うことができている．

日本はこのようなプロジェクトを推進する場合の

スローガンとしてオールジャパンという言葉を好んで使う傾向があるが，これは日本が世界をリードしている分野であればこそ成立するシステムである．もっともオールジャパンと言っても，そこに入れない企業も多々あることから，むしろそのような企業の不満の声なども時折耳にする．

韓国の場合には先端素材で世界をリードしているわけではないため，むしろグローバルな協業を積極的に進めていく風潮がある．オープンイノベーションを積極的に語る韓国の姿勢とも言える．

国や地域を越えた戦略に

東日本大震災の後で，ビジネスにおけるサプライチェーンの考え方に少しずつ舵が切られているように見える．すなわち，日本の素材産業が日本国内での生産のみにとどまらず，国や地域を拡大した戦略に展開しつつある．

サムスンの有機ELやLED，そしてリチウムイオン電池でも住友化学，宇部興産，戸田工業という力のある企業との合弁事業が昨年にスタートしている．いずれ大きな成果が出てくるものと期待される．

合弁のスタイルまで行かなくても，日本の素材産業との関わりは増す一方で，その分，ビジネスモデルを早期に積極的に展開している日本の企業も少なくない．サムスンとのビジネスでも協議スタイルや取組方法の改革によって大きく業績を伸ばしている企業もある．

双方にとってWin-Winの関係ができることが，ビジネスを発展させる要素のひとつと考えれば，お互いの立場を理解し，相手の立場になって協議することから成功への道筋が描かれることになろう．

2.　サムスンの企業文化に見る強み

日本ではエレクトロニクス産業が低迷を続ける中，CEOの交替を始め事業形態の再構築や合理化，人員削減など，急を要する経営の建て直しが急ピッチで進められている．

ソニー，東芝，日立の3企業に，産業革新機構が2,000億円の出資よって4月1日に設立されたジャパンディスプレイ（従業員約6,200人，資本金2,300億円）は，今後の日本のディスプレイ産業を占う試金石として注目される．

中小型液晶の既存事業の合体とともに，有機ELの分野では各社の得意とする技術を重ね合わせ，世界市場での新たなビジネスを開拓する戦略を掲げている．ディスプレイ産業では世界をリードしてきた日本の威信をかけた協業体制である．

発展支える強み

一方，サムスンのグローバル戦略が功を奏して多くの分野で発展している姿が特徴的である．その発展を支えている強みを，韓国で5年間の業務を経験した私なりに分析すると，大きく6つの要素が見えてくる．その構成は，①貪欲な学びの精神，②徹底したベンチマーク，③地域専門家養成による地域密着姿勢，④競争意識，⑤人材のグローバル採用，⑥責任体制である．

①の貪欲な学びの精神は，歴史的にあらゆる分野で後発からスタートしたハングリーなキャッチアップ体制により築かれたもので，短期間で追いつき追い越すという明確な目標によって推進されている．その精神はビジネスの側面だけではなく，語学研修やスポーツなどでも同様で，徹底した集中と短期習得の努力が随所に見られる．

②の徹底したベンチマークは，競合他社の製品をベンチマークすることは基より，コスト分析，アフターサービス，さらには研究開発テーマまで，その範囲は広大である．そこから競争力のある製品というハードと，信頼性やブランド力というソフトの充実などへ繋げていっている．

③の地域専門家養成による地域密着姿勢は，90年の制度開始により現在では4,200名以上を養成した．先進国を始め新興国，途上国に至るまで希望者が非常に多い中，厳選された人材のみが受けられる教育システムであり，その人材育成にはこれまでに320億円以上を投じている．国や地域の文化，慣習を体得することが，その国や地域でのビジネスを展開する上で力強い原動力になる．

④の競争意識は，企業の発展を支配する最大の源泉のひとつであり，企業間競争意識は当然ながら，個人間競争意識を前面に打ち出すところに日本との違いが見え隠れする．産業界では圧倒的に就職人気度の高いサムスンに入社すれば，ひとまず安泰と考えるのは日本人的発想のようで，現実はそうではない．

大学進学，就職活動で競争意識をむき出しにして勝ち得た入社の後に待っているものは，サムスンでの同期，同僚との新たな昇進競争である．したがって，その生き残りに限りなくエネルギーを投じるが，限界を感じて早々に退社する場合も多く，結果として平均在籍年数は約8年などと言われる所以がある．このような個人間競争意識が企業の競争力を支えている部分は少なからずある．

外国人を積極採用

⑤人材のグローバル採用は，これだけ市場がグ

ローバルな動きをしている現状では避けては通れない，むしろ積極的な取り組みが必要な時代を迎えている．日本のソニーもイオンも新卒採用から外国人枠の比率を設定している．そうなると，日本の学生も外国人を含めた就職競争の現場に晒されるわけで，しっかりした自身の強みとアイデンティティをもっておく必要がある．

サムスンのインドにおけるソフト開発センターや，ソウル，東京，上海，サンフランシスコ，ロサンゼルス，ロンドン，ミラノなど，拠点地域ごとにおけるデザインセンターなど，グローバル人材の活躍の場は無限と言えるほどある．

4月中旬には韓国で二日間にわたり，外国人役員のみを対象にした合宿形式のグローバルセミナーが開催され参加した．

⑥の責任体制は明確であり，なかなか明確な責任をとらないケースの多い日本企業との違いもここには存在する．特にCEOや役員の責任は，事業の失敗は言うに及ばず，成長や発展の成果が見えない場合には，それでも責任が付いて回る．

以上の6つの要素を束ねてみると，それが結びつくことで大きな相乗効果と強みを発揮する．それがスピード感と決断力のある経営体質，市場が何を必要としているかのタイムリーなマーケティングと製品開発，技術力とブランド力の向上を促す強みと分析する．

（サムスンSDI常務役員，名古屋大学客員教授）

化学系同窓会の価値を高めるために（提案）

小林　雅彦（昭和36年応化卒）

同窓会は将来の道を模索する学生から，時間をたっぷり持つ退役OBまで，それぞれ経験と識見の異なる幅広い人材をカバーしています．これらの会員が持つ知識，識見を総合すると一大知的財産の集合体となります．

現在の日本の大学教育は，複雑化高度化する国家の問題を解決する人材の育成を求める社会のニーズに追随できていないという気がします．同窓会という知的財産を，有為な人材を育成するシステムのレベルアップにもっと活用できないか考えてみることは価値があると思います．（尚，このような活用を成果あらしめるためには，大学側が主体性を持って同窓会活動に関わり，マンパワーと資金を提供する必要が出てくると思います．）

また，卒業生が抱える問題の解決に会員が知恵を提供するという場として同窓会を生かせたら，会員の参加意欲も増すと思います．

このような観点から同窓会の目的と会誌の内容について考えをまとめてみました．参考になれば幸いです．

同窓会の目的

1. 卒業生の経験，識見を学生，教職員のレベルアップのため活用し，国家にとって有為な人材を育てることに寄与する．
2. 会員が抱える問題解決に資するため会員同士の知恵，情報交換の場として活用する．
3. これらの活動を盛んにするための会員の交流の場を作る．

会誌の内容

より多くの会員が興味を持って読めるような内容を増やす工夫が必要と考えます．卒業生が書くメッセージ性の乏しい懐古的エッセイは多くの人の興味を引かないと思います．会員が抱えている問題解決に資するような内容を増やすようにすれば，より多くの人に興味を持ってもらえるのではないでしょうか．

会員からの投稿を募集する場合，漠然と投稿を求めるのではなく，解決したい問題をはっきりさせたテーマを設定すると，投稿してみようという気になる人が増えるのではないかと思います．

このような観点から，会員の積極的交流の場の一つとして，会誌の内容について考えて見ました．

1. 事務連絡的な事項はタイトルのみ示し内容はホームページで見るようにする．
2. クラス会報告は廃止する．（クラス内で情報共有すればよいことです）
3. 学生，教職員，卒業生（現役世代），卒業生（退役世代）それぞれの興味対象を意識したテーマを設定し，投稿を中心に編集する．
   問題解決のためのテーマ，視野を広げるためのテーマを選定する．
   （テーマも投稿で提案してもらってもよい）

4. 会員の抱く疑問，問題に対して経験豊富な会員が提言，助言を投稿する．
・学生の疑問，問題提起に対する卒業生及び教職員からの提言，助言
・大学教育のレベルアップのため，教職員の疑問，問題提起に対する学生，卒業生からの提言，助言
・問題を抱える卒業生の疑問，相談に対する学生，卒業生及び教職員からの提言，助言
5. 楽しいページもあってよい（クスッと笑える話）
6. 受賞者，物故教員の紹介は簡潔にし，詳細はホームページに掲載する．業績に関しては現在の社会でどのような形で役に立っているかが分かると興味が湧くと思います．

会費納入向上について

井上　真琴（昭和 63 年応化卒）

国大化学会ニュースの中で会費納入について，会費納入時の負担になることは何か，との問いかけがありましたので，それに関して思うことを書きます．

その１　必要性が強く伝わってこない

会費が国大化学会と大学，学生を支えている，とのキャッチフレーズは素敵だと思いますが，具体的に，どう支えているのか，というのがピンときません．たとえギリギリの状態とはいえ，今現在でも機能しているのなら，会費納入者が増えなくても大丈夫なのでは，とお気楽に思ってしまう人がいても，仕方がない気がします．ギリギリで困っているとしても，その『困っている』感が伝わってきません．

具体的に，どれだけ増えたら，どういうことをします（あるいはしたいと思います，もしくは，会費が足りなかったので，これができませんでした），というのを挙げてみれば，もう少し，必要性が伝わるのではないでしょうか．

その２　面倒

個人的には引き落としにしているので，自動的に落ちてくれて，面倒はなくなりましたが，それまでは，わざわざ用紙を持って払いに行くのが面倒でした．引き落としにしてしまえば楽ですが，引き落としにする手間が，やはり面倒に思えます．どんな簡単な方法になっても，お金を払う，という行為そのものが面倒です．その『面倒』を超える必要性が感じられない限り，会費を支払う会員は増えないと思います．

私自身が会費を払っているのは，単なる義務感からです．卒業後，横浜からも化学からもはなれて生活していて，所属していた研究室もなくなったので，国大化学会を身近には感じられません．『義務』だけでは，全員に訴えかける力はないと思います．

例えば，新聞やテレビで自然災害が報じられ，併せて支援金の支払先が記された時に，協力したい，と思う方は多いと思います．自然災害に限らず，助けたい，と思う話題は，色々と見かけます．そのように，『助けたい！』と思えるようにはできないでしょうか？

その３　つながりが感じられない

会費納入についてのところの最後に書かれた『会を発展させるための基本』，その『会が発展したら，どうなるのか』というのがピンときません．これは，自分が会に所属している，という意識が足りないからだと思います．これに対しては，会を身近に感じていらっしゃる方のご意見が参考になるのではないでしょうか（どうして身近に感じられるのか，というご意見をふまえて，どうしたら身近に感じられるようになるのか，というのがみえてくるかもしれません）．

長い割にお役にたたない内容で申し訳ありませんが，以上，会費について思っていることを挙げてみました．

不真面目な会員で申し訳ありません．